

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	山 田 直 之
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">芦田恵之助の教育思想に関する研究 － 随意選題を中心に －</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	丸 山 恭 司	
審査委員	教 授	坂 越 正 樹	
審査委員	教 授	深 澤 広 明	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、大正から昭和にかけて日本の綴方教育をリードした教育実践家である芦田恵之助(1873-1951)の教育思想を、その「随意選題」という綴方指導原理（教育方法）に着目して明らかにしようとするものである。</p> <p>芦田に関しては既にその影響力の強さから、教育史研究や国語（科）教育研究において多くの研究蓄積がある。とりわけ、綴方指導にあたり主題設定を書き手自身にさせるといふ随意選題は、芦田の綴方教育の中心的な指導原理であり、その後の綴方教育を方向付けた重要概念であるとの評価が共有されている。しかしながら、芦田の随意選題は子どもの自己活動に主軸を置く西洋近代教育思想と軌を同じくするものであるとの理解が定着している一方、この理解は日本の禅思想に影響を受けた芦田の人間形成観とは必ずしも相容れるものではない。これまでの研究は、新教育の潮流における芦田綴方教育の先駆性を強調するあまり、その近代教育的特性に焦点を当ててきたが、芦田の随意選題論には近代教育の枠組みに収まらない特性を有しており、芦田の教育思想はいまだ十分には解明されていないのである。</p> <p>以上の先行研究における問題点を踏まえ、本研究では、芦田自身が書き残したものを、他者からの影響や論じた時代状況・文脈を考慮しつつ丁寧に解読することを通して、彼が随意選題という着想を得るに至った経緯、随意選題の基底となる諸概念、すなわち、「人文一致主義」「自己」「修養」「同士同行」の内実の検討により、芦田の一貫した人間形成観を提示することが目指された。</p> <p>本論文は、九つの章から構成されている。</p> <p>まず、序章では、先行研究が整理され、問題の所在、研究の方法、本研究の見取り図が述べられた。</p> <p>第1章では、随意選題をめぐる諸解釈が取り上げられ整理された。芦田の随意選題は、綴方教育における課題主義を主張する友納友次郎との論争を通して広く知られるようになる。この論争が選題をめぐる課題主義と自由主義の論争として描かれた経緯と、先行研究における代表的な論争理解として、高森邦明、波多野完治、野村芳兵衛それぞれの論争理解が取り上げられ、批判的に整理された。</p>			

第2章では、芦田がいかなる経緯によって随意選題という着想を得るに至ったのかが、彼の経歴を追うことで検討された。特に次の四点が検討された。①芦田が直接経験の重要性を認識することになる『丙申水害実況』の執筆経緯、②随意選題の重要な原理となる自己活動への着目にいたる樋口勘次郎の影響、③随意選題の方法論的手順を確立することになる兵庫県姫路中学並びに東京高等師範学校附属小学校での実践、④禅の思想を得るに至る岡田虎二郎の影響、である。これらの過程を通して、芦田は随意選題を一つの教育思想として洗練させたのであり、その思想は「文は人なり」「文は人格の反映である」との標語に表されている。

第3章では、上記の経緯によって得られた随意選題の基底にある「人文一致主義」の内実が検討された。「人文一致」という考え方自体には科学的根拠がなく、この点が批判されてきたにもかかわらず、随意選題を実行するにあたって重要な役回りを演じている。このことから、随意選題の教育的特徴が明確にされた。すなわち、児童は書記行為によって自らを律することが期待されているのであり、児童は自ら何を書くかを選ぶことによって、自己を確立しようと努力することになるのである。

第4章では、随意選題によって確立されるとする「自己」がどのようなものと考えられていたのかが検討された。芦田自身が随意選題を行為レベルで論じているのか、それとも思想レベルで論じているのかによって、自己の捉え方に差があり、西洋的自己観と東洋的自己観が混在していることが示された。

第5章では、芦田の人間形成観を捉えるにあたり重要概念となる「修養」に焦点をあて、随意選題において「修養」がどのように捉えられているのかが検討された。芦田は教育論としての修養論を教師論として論じており、学習者に先行する人格的成熟を教師に求めている点に特徴のあることが示された。

第6章では、前章同様に、芦田の人間形成観を捉えるにあたり重要概念となる「同志同行」に着目した。同志同行は、教師と学習者が修養によって、ともに自らの「とらわれ」からの解放による自己の確立を目指すものである。同志同行は修養と同様に近代教育の枠を逸脱する人間形成観をもつものであることが示された。

第7章では、以上の「人文一致主義」「自己」「修養」「同志同行」の内実の検討から、随意選題が目指した人間形成は、教育方法としては西洋の近代教育的要素を含むものであるものの、思想としては禅思想に強く影響を受けた、教育者と学習者の関係によって教育行為を捉えつつ、指導原理であることが論じられた。

最後に、終章において、以上の成果がまとめられ、作文・綴方教育が展望された。

本研究は次の点において高く評価できる。すなわち、芦田の著作等を丁寧に解読することにより、先行研究において得られていなかった、芦田の一貫した教育思想を示すことができた点である。

一方、本研究には次の限界があった。すなわち、芦田教育思想としての一貫性を見出すことができた一方で、その教育実践との関係や同時代の教育者への影響については十分に見通すことができておらず、今後の課題として残されている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成30年2月12日